

然シ通常葉ト花葉トノ關係ヲ考察スルニハ甚ダ好都合ナ材料ト言フコトニナルカラカ、ル個體ヲ栽培シタラ教
材トシテ甚ダ面白イト思フ勿論一個ノ畸形ニハ過ギナイガ人間ノ畸形デアアル有尾人ト同様ナ意味デ花ノ起原ヲ
語ルモノトシテ大切ナモノデアアルカラワザワザ報告スルコトニシタ

○斷 枝 片 葉 (其三十二)

牧 野 富 太 郎

● どんとばな

神宮司廳藏版ノ『神都名勝誌』卷ノ一二左ニ掲ゲタ圖ヲ添ヘテどんと花ト云フ植物ガ出テ居

どんと花の圖 大加圖



『神都名勝誌』ニ出セルどんと花ノ圖
(縮小)

リ其レニ「此の地〔伊勢齋宮ニアル齋王蔭子
ノ御墓道〕より、良位に當り、古路と稱する
所あり。此の所に、二町許もある沼地あり。
一種の花菖蒲生ひたり。土俗、どんと花とい
ふ。花時には、恰、紫雲のたなびけるが如し。
近世まで、人の、杖を曳くもの多かりき。頃
年、開墾して、舊觀を失ひたりとぞ、これ、
齋宮寮花園の遺趾ならむか。」ノ文ガ付ケテ
アル、此どんとばなハ今日普ネク人家ニ作ラ
レテアルはなしやうぶノ母種即チ原種デ我邦
ヲ通ジテ諸州ニ野生スル、殊ニ野州日光山中
ノ赤沼ケ原ナドニハ見渡ス限リ之レヲ生ジ花

時頗ル見事デアル花色ハ一樣ニ紅紫デ餘リ變化ガナク葉ハ一般ニ瘦セテ隆起シタ中脈ガアル、昔奥州ノ安積^{アサカ}ノ沼ノ花がつみヲ採リ來ッテ今日ノはなしやうぶヲ作ッタト云フ其謂ユルはながつみハ即チ此どんどばなニ相當スルガ然シ此どんどばなヲ指シテ斯クはながつみト呼ブノハ誤リデアルト思フ何トナレバはながつみハ元來まこも(禾本科ノ水草)ノ花デアルカラデアル是レハ多分其時安積ノ沼デノ採集者ガ古今集ニアルみちのくのあさかのぬまのはなかつみかつみるひとにこひやわたらんといフ歌ヲ強テ此レヘ附會サセ縦マニ其美稱ヲ稱ナヘタモノデアラウ、此どんどばなノ名ハ濃州邊デモ亦云フト見エテ飯沼慾齋著『草木圖說』卷ノ二ニモはなしやうぶノ條下ニ「一種山中ニ自生スルモノアリ之ヲドンドバナト云フ、葉劍脊アッテ家殖ノ品ト同ジケレドモ花小ニシテ不堪觀」ト記シテアル、此どんどばなハ即チ今日吾人ノ稱スルのはなしやうぶデ Iris Kaempferi Sieb. var. spontanea MAKINO. ノ學名ヲ有スルモノデアル

●Fatsia ノ語原

Fatsia ハ我が八〇手ノ

屬名デ會テ DECAISNE ヲ PLANCHON トノ兩氏ガ建テタ名デアル其語原ノ解ハ私ノ見タ書物ニハ唯日本ノ名カラダトシテアル外ハ書イテナク即チ土言ノ Fatsi. カラ來タトシテアルニ過ギナイ然シ此屬ノ植物ニ單ニはちト云フ植物ハナイカラ私ノ考フル所デハ是レハ多分八手ト書イテアッタハハちト音讀シテソコデフアチア即チ Fatsia ノ屬名ヲ作ッタモノデハナイカト思フ

●冬期ニ小枝ノ墜チル樹木

冬期ニ至テ自然ニ小枝ノ枯

レ墜チル樹木ハ敢テ珍ラシクハナイ私ハ會テ其レ等ヲ『植物學雜誌』ニ書テ發表シタコトガアッタガ其レヘ追加センガ爲メニ此ニ三ツノ樹ヲ舉ゲル即チ其一ハぼろぼろのさデ其ニ二ハうはみづぐくら其ニ三ハけんぼなしデアル、ぼろぼろのさハ九州ニ産シ其小枝ハ秋落葉スル時分ニ墜チル其離レ去ッタ痕ハ多少肥厚シテ居ル、又うはみづぐくらモ小枝ガ秋ニナッテ落葉後ニ續イテ散落スル特性ガアル、又けんぼなしハ是レ亦秋ガ深ク木枯シガ吹ク時分ニナルト其端ニ實ヲ着ケタ小枝ハ樹上カラ地上ニ落下スル

●ひばトびはトノ間違

陸中ノ巖

手郡ナル澁民村ニ寶徳寺ト云フ寺ガアッテ其寺ノ前ニ大人ガ三人シテ抱ヘル位太イ針葉樹ガアル林學博士本多

靜六君が大正二年十二月ニ發行セラレタ其著『大日本老樹名木誌』ノ第三六四頁ニ此寶徳寺前ノ大樹ヲ門枇杷ト書キ尙其傳說トシテ「同所ニ尙地上五尺ノ周圍一丈樹高十間ノモノ一本アリ共ニ枇杷トシテハ稀レナル大木ト云フベシ傳說ナシ」ト書イテアルカラサー大變先ヅ眞ッ先キニ不審ヲ抱イタノガ日本柑橘研究家トシテノ第一人者田村利親君デアッタ早速同君カラソシナ大キナ枇杷ハ珍ラシイ果シテ其地ニ其レガアル歟ト同地ヘ聞ヒ合セタラ何ンノ事ツレハひばノ間違デアッタノデ同君ハ呆氣ニ取ラレタ(是レハ今カラ餘程前ノ事デアアル)、扱其ひばハ同地ノ方言デアアルノデ果シテ其正體ハ何樹デアアルカ其レガ突止メ度ノデ私ハ三四年前ニ之レヲ同ジク澁民村役場ヘ聞ヒ合セタ所其返事ハ矢張ひばデアッタ無論ビハ(枇杷)デハナカッタ然シ單ニひばデハ尙其樹ガ能ク吞ミ込メンノデ今度ハ巖手縣師範學校在勤ノ鳥羽源藏君ヲ煩ハシテ其小枝ヲ送ツテ貰ッタラ始メテ其レガなはら(Chamaecyparis pisifera ENDL.)デアアルコトガ判ツタ其後同君ハ親切ニ其樹ノ寫眞ヲモ贈ラレタ、聞ク所ニヨレバ此地方デハひのきトさはらトラドツチモひばト呼フトノ事デアアル

●春時枝頭ニ芽出ツたらノ
 芽 讃州三豊郡辻村大浦優雄君ヨリ來信ノ一節「春暖い時季が訪づれると、とり／＼の草木の芽は先づほほ笑む、中にもたらのきの芽は殊に大きくこれが山人の酒興を増すといふ、それは今將にほころびんとする芽を摘み來り之を熱灰の上で焼いて味噌和とする其の味はさまでよいものでは無いが香氣はまことに愛すべきものだと聞く、又湯で煮たものを味噌和としてもよいが香氣が少くなると云ふ……山人から聞いたまゝを書いた次第です」

●ほたるぶくろノ花ヲ食フ

白馬山ノ北十里バカリ信越界ニアル小谷(ヲタニトハ)溫泉デハ

●桑ノ葉ヲ飲料トス

原宮男君カラ聞ク所ニヨレバ周防國大島郡日良居村大字土居デハ其土地ノ習俗

桑ノ葉ヲ生ノマ、デ日ニ干シ乾イタノヲ揉ミ毀ハシ焙烙デ炒リ之レヲ普通ノ茶ノ如ク湯ヲ入レソレヲ飲ム、タ
 ヲ口ザワリ軟カナ感ジガスルノデ之レヲ飲ムバカリデアアル又時ニ茶粥ニ入レルコトモアル(私ハ同君カラ其實

物ヲ貰フタ事ガアル)

●何首烏ノ塊根ノ大サ

我邦ニ生エテ居ル (原トハ支那カラ來テ) 何首烏ノ根

ノ最大ナルモノハ周リ一尺二寸 (曲尺) 重サ四百二十匁ニ達スル、又何首烏ノ塊根ハ陰地ノ根ニハ出來ズニ陽地ノモノニ能ク生ズル故ニ陰地デハ根ヲ堀テモ一向其塊根ニ出會ハヌトノ事デアル

●なすノむだ花

なす (茄) ニむだ花ノアルコトハ一タビ茄畑ニ行ツテ見タ人ニハ直グ分ル、私ガ曾テ『科學知識』誌上デ其むだ花ヲ書イタ事ガアツタガ其時ノ圖ニむだ花ノ花柱ガ少々雄藥カラ上ニ出テ居ツタラ (此レハ實物カラ其通り寫生シタモノ) 茄ヲ研究シテ居ルト稱スル或地方ノ某氏カラむだ花ノ花柱ハ決シテ雄藥カラ上ニハ出ズ悉ク皆短カク下ニ潛ンデ居ルモノデアルトテ私ノ描イテ出シタ圖ヲ非難シ來ツタ事ガアツタガ私ハ其非難ヲ甘受スルコトハ出來ナカッタ、ナゼナラバ茄ノむだ花デモ花柱ガ雄藥ヲ超エテ更ニ上ニ突キ出テ居ルコトハ決シテ珍ラシクナイカラデアアル、中ニ潛ンデ短イモノモ無論普通ニアルガ又前記ノ様ニ雄藥カラ上ニ出タモノモ少クナイ殊ニ私ノ『科學知識』ニ描イテ出シタ花ハ非常ニ勢ヨキ強壯ナ株ノ枝ニ咲イタモノデアッタノデ正ニアノ圖ノ通りデアツテ決シテ間違ヘテ描イタモノデハナイ私ハマダソナヘマハセンツモリデアアル、むだ花ノ花柱ガ必ズ皆雄藥ヨリ短クテ下ニ潛ンデ居ルトノミ思ツテ居ル人ハ未ダ廣ク茄畑ヲノゾカナイおめでたい人デアアル

●やっこさう琉球ニモ産ス

やっこさう

(Mirastemon Yamamotoi MAKINO.) ガ琉球ニモ産スルコトガ明

ニナツタ即チ沖縄島那覇國有林内ノしいのきノ根ニ寄生スル

●大ナルびなんかつら

東京駒込妙義坂

上ノ某氏ノ庭内ニ在ルびなんかつらハ其藤臺頗ル太ク根元ノ大サ周圍九寸、根元カラ一尺五寸許リ上ノ處デ周圍五寸六分ヲ算スル

●支那人ノ植物方言ニ三

大賀一郎君ノ報ズル所ニ據レバ滿洲デ支那人ハさみか

げさうヲ眞珠梅、さくらさうヲ翠蘭花ト云ヒひろはおきなぐさヲ毛姑草花、老姑草花、老谷花ト云ヒ尙此おきなぐさヲ張家口デハ白頭草トモ野大人トモ云ヒ北京デハ白頭翁又ハ貓頭花ト稱スル

●だいこん根上ノ細根

だいこんノ根ニハ其兩側ニ細根ガ列ヲ成シテ生エテ居ルガ此細根ハ其子葉ニ對シテ對生シテ居ル